

暗殺姫は籠の中

小桜けい

Kei Kozakura



RB

レジーナ文庫

登場人物
紹介

軍師

フロッケンバルク国の
下級錬金術師の
服装をした
謎の男。

エルンスト

ロクサリス国の魔術師。
冷酷な人物。

ルーディ

フロッケンバルク国の
下級錬金術師。
妙に嗅覚が鋭い。

アイリーン

ヴェルナーの幼馴染。
バークレイ商会という
隊商の首領の娘。

ロットン

フロッケンバルク国の
衛兵の息子。
よく城の中庭に
遊びに来る。

ヴェルナー

フロッケンバルク国の若き国王。
穏やかな性格で
臣下にも慕われている。
賢王として知られ、
時には策士な一面も見せる。

ビアンカ

ロクサリス国出身の少女。
全身に猛毒を宿す
『毒姫』として育てられた。
隣国の王ヴェルナーの暗殺を
命じられるが……!?

目次

暗殺姫は籠の中

7

書き下ろし番外編
国王夫妻の秘密の観戦

345

暗殺姫は籠の中

プロローグ

——明日、あの綺麗な城の王をわたしは暗殺するのね。

ビアンカは宿の二階で、窓から夕暮れの外を眺めていた。

夕陽に輝く北国フロッケンベルクの王城は、とても美しい。あんなに綺麗な建物、初めて見た。

城の手前からは城下街が広がり、ビアンカのいる宿もその中にある。

窓から見える街の通りは、旅装をした人や幌馬車^{ほろばしや}でどこも埋め尽くされ、賑やかだ。

旅人の多くは、剣を下げて兜や箆手^{かぶとこて}などを身につけた男性だった。彼らは他国の戦に参加して金を稼ぎ、故郷であるこの国に帰って来た傭兵^{ようへい}だと聞く。

こうした街並みも、傭兵も、数日前までビアンカは見た事がなかった。

彼女は隣国ロクサリスにて、老師と呼ばれる優れた魔術師たちに育てられ、今まで外の世界には一歩も出る事が許されなかったのだ。

なぜならビアンカは、全身に猛毒を宿した暗殺道具『毒姫』なのだから。

毒姫が外の世界に出られるのは、老師に暗殺を命じられた時のみ。ビアンカは明日、フロッケンベルクの王をその身の毒で殺し、すぐに自害しなければならない。

死は怖いけれど、老師の命令である以上、仕方ないことだ。

胸中で領いた時^{うづな}、背後から大きなイビキが聞こえた。振り向くと、テーブルに突っ伏して熟睡している中年男の姿がある。その足元には、空の酒瓶が何本も転がっていた。

男は、老師の命を受けた使節団の長で、明日はビアンカをこの国の王に献上する役となっている。

起きそうにない使節団長と、窓の外に広がる楽しげな街並みへ、ビアンカは交互に視線を向けた。

勝手に出歩くなと言われてるので、初めて外に出られたのに、一歩も自由に歩いていない。物珍しい景色を、馬車や宿の窓からじっと眺めるだけ。

いけないと思いつつ、抗^{あらが}いがたい誘惑が、ビアンカの足をそろそろと戸口のほうに歩ませる。

(ほんの少しだけ……すぐに戻るのだから……)

ドキドキと心臓を高鳴らせ、ビアンカは宿の前にある通りに出た。

旅人たちはそれぞれ、自分を歓迎してくれる家を、一目散に目指しているらしい。雑踏の中、道の脇にある家々から、「おかえり!」「待っていたよ!」などと、嬉しそうな声がかかる。

賑わいに圧倒されながら、辺りを見物していたビアンカは、ふと一点に視線を留めた。道脇で、右腕と左足にギブスをはめた傭兵らしき男が立ち往生していた。松葉杖の先が溝に引っかかってしまったようだ。片腕と片足しか使えなくては、自力で抜くのは難しいだろう。

「……お手伝いしましょうか?」

ビアンカが声をかけると、男が驚いたように顔を上げた。

兜を深くかぶっているうえに、髭が伸び放題なので、男の顔はよく見えない。もじやもじやの髭の奥から「すまない。頼む」と微かに聞こえた。

ビアンカは自身の毒が周囲につかないよう、常に手袋をはめている。思いきって両手で松葉杖をしっかりと握り、男と共に力を込めて引くと、意外に深く食い込んでいた杖はなんとか抜けた。

無事に抜けた松葉杖を男に渡し、ビアンカはホッとして微笑む。

そのまま素早く踵を返して宿に駆け戻ると、幸いにも団長はまだぐっすり寝ていてく

れた。

勝手に出歩いたうえ、見知らぬ相手に接触するなんて、もしバレたら大変なところだ。改めて思うと怖くなってきたけれど……死ぬ前に少しでも、誰かの役に立てたことは嬉しい。

翌日の昼。

ビアンカは昨日見た美しい王城の、煌びやかな謁見の間に入った。

顔を覆っていたヴェールを静かに取り、玉座にいる若き国王——暗殺対象へ深々と頭を下げる。

「お目にかかれて光栄でございます陛下。私はビアンカと申します。不束者でございますが、どうぞロクサリス国からの献上品の一部に、この身が加わることをお許しください」

1 初めての返答

貴族や国同士のお付き合いには、賄賂^{わいろ}とはまた違った意味で、互いへの贈り物が欠かせない。

それは相手に対する敬意の表れだったり、富裕さを見せつける目的だったりするが、とにかく高価な品が行き来する訳だ。

たとえば鳥の卵ほど大きなルビー、箱にずらりと並んだ大粒の真珠、職人が十年がかりで織りあげた見事な絨毯^{じゅうたん}、象牙に毛皮に金銀細工……

そして中には、生きた贈り物もある。突然変異の珍獣や、美しい魚など。ただ、これは多くの場合、微妙だった。輸送中に死んでしまう可能性が高かったし、その後の管理にも手間がかかる。気に入らなかったからといって、始末してしまうのに抵抗を感じる者もいるだろう。

だから『生きた土産^{みやげ}』と言えは、大抵、見た目の美しい奴隷^{どれい}を指す事が多かった。

ビアンカは、ロクサリス国から隣国の王へ差し出された、生きた献上品という訳だ。

実際、彼女は一国の王への贈り物として申し分ない美少女だった。

きめこまやかな雪白の肌に、絹糸のように艶やかな栗色の長い髪。卵型の小さな顔に輝くのは、大きなエメラルド色の印象的な瞳だ。

美しいドレスに包まれた肢体^{したい}は、全体的にすらりとしている。ただ胸や腰まわりは、十八歳という年齢相応に十分発達していた。

ロクサリス王家秘蔵の名画や、見事な細工の宝飾品などの横に並べられたビアンカを、謁見^{えっけん}の間に同席しているフロッケンベルクの家臣たちがジロジロと眺めてくる。

彼らの胡散臭^{うさんくさ}げな視線に、国王暗殺という目的を見透^{みす}かされているような気がして、ビアンカは非常に落ち着かない気分だった。

もともと、こんな立派な場所に立つのは初めてだったから、緊張していた事もある。フロッケンベルク王宮の謁見の間は、とても煌びやかで荘厳だった。

精密な彫刻が施^{ほどこ}された白い柱に、金と深い青で彩^{いろど}られたドーム型の天井。床は磨きぬかれた大理石で、踏んで歩いていいものか躊躇^{ためら}いそうになるほどだ。

ビアンカは手袋をはめた両手を握り合わせ、全身の震えを必死で抑える。

ともすれば俯^{うつむ}きそうになる顔を正面に固定し、フロッケンベルクの国王ヴェルナーを見つめた。

彼はまだ二十代後半といったところだろう。少しくせのある金茶色の髪に、深い色の青い瞳。顔立ちとはどちらかといえば、男らしいというより、線の細い繊細なつくりをしている。

均整のとれた身体に丈の長い立派な上着を羽織り、風格のあるどっしりした玉座に座る彼は、いかにも高貴な雰囲気をもしだしていた。

ビアンカがヴェールをとると青い目は軽く見開かれたが、驚いたようなその表情はすぐに消えた。

「ようこそ我が国へ。歓迎する、ビアンカ」

若き王は、ビアンカへゆったり微笑みかけると、彼女の斜め前に立っているロクサリス国の使節団長へ視線を移す。

「ロクサリス国王からの、素晴らしい贈り物の数々は頂戴した。近く、我が国からも使者を向かわせていただく」

「ありがたき幸せに存じます」

中年の使節団長が丁寧に返答をし、格式ばった言葉でしばらくヴェルナーとやりとりを続ける。ビアンカは、みじろぎもせずにそれを聞いていた。

しかし、使節団長は話の途中でにやかな笑みを引き攣らせる。そして、ビアンカを

伴って謁見の間を出る頃には、額にうっすらと汗まで浮かべていた。

何しろ彼は献上品とビアンカを置いてすぐ去る予定だったのに、言葉巧みにヴェルナーに誘われ、この城へしばらく逗留する事になったのだ。

城の召使いが、使節団員たちを部屋に案内する。

ビアンカも彼らの近くに部屋を与えられるそうだ。城の長い廊下を歩きながら、ビアンカは心の中で首をかしげた。

(どうして、こうなったのかしら……?)

柔らかく流暢なヴェルナーの言葉は、使節団長へ絡みつき、いつの間にか数日の逗留を断れないような話の流れになっていた。

なぜヴェルナーが使節団を引きとめたのか不思議だったが、ビアンカはいつも老師に命じられているとおり、余計な事を考えるのはやめた。

城の内部を眺めつつ、硬い廊下にコツコツと足音を響かせて歩く。

フロッケンベルクの王宮は、彼女が見知った場所とは随分違っていた。

ビアンカが育ったのは、希少な魔法の才を持つ者が多い、ロクサリス王国。その中でも重要機関である魔術師ギルドだ。彼女は、ギルドの広大な敷地の一部、高い塀に囲まれ、上部を透명한魔法の結界で覆った『庭園』と呼ばれる場所ですつと暮らしていた。

寒風や雪を結界の屋根が防ぎ、いつも温かく保たれた『庭園』では、薬草がすくすくと育つ。

あの『庭園』はそういう場所だ。生まれつき魔力を持つ魔法使いの中でも、特に高い魔力を持った人間——偉大な、選ばれし存在である『老師』たちが管理する、常春の園^{とこはる}。そこは、老師たちが魔法に使うための薬草を、効率よく育てあげる場所だ。

ビアンカもその薬草の一種だと教えられていた。

だから、『庭園』で育ったビアンカたちは、身体づくりこそ人間でも、人間ではないと老師たちは言う。『庭園』の管理者で魔術師ギルドの長官でもある老師たちは、ビアンカたちを『庭園』の産物だと見なしていた。言わば、肉でできた植物だ。

ビアンカたち肉植物は老師たちが管理する『庭園』のため、様々な用途に使われる。

大抵は、新しい魔法薬を試す時の実験体だが、見た目の良い肉植物は、外の人間へ奉仕するように教育された。

ビアンカは、その中でも『毒姫』と名づけられている品種で、一際変わった用途に使われる肉植物だ。

育て方は、大変難しい。女の赤子に、ある毒草を毎日、少量ずつ摂取させ、ゆっくりゆっくりとその毒への耐性をつけさせていく。

大多数の赤子が毒に負けすぐに死んでしまい、生き残る者は一割に満たない。けれど、毒に打ち勝ち成長出来た少女は、全身の体液が猛毒と化し、髪にも爪にも強烈な毒を帯びた『毒姫』となる。

彼女たちの指や髪が、ほんの少しでも触れた水は、一口飲んだだけでも、通常の人を三日三晩は苦しめる。水に染み出した毒の量によっては、手足が一生動かなくなる場合もあった。

彼女たちの身体で最も有害なのが体液で、口にすれば、わずか数滴で即、死に至る。

毒姫は、腕力も武芸も持たない。非力な弱い少女だけれど、口づけ一つで相手の命を摘みとれる暗殺道具なのだ。

美しく豪華に飾られた彼女たちは、好意を装って敵のもとへ献上される。

生きた献上品は大抵の場合、すぐ夜伽^{よこぎ}に使われ、触れ合った途端に相手を絶命させるのだ。

そのあとで、あらかじめ自害の方法を教え込まれている毒姫たちは、敵の部下に見つかる前に素早く自らの命も摘みとる。

ビアンカも今夜、ヴェルナーの寝室でそうなるはずだ……

——数日前の夜。

ビアンカはいつものように、『庭園』の草花の手入れに行こうとしていた。肉植物たちの殆どが、『庭園』の植物を育てるために一日中働かされる。

しかし数人いる毒姫たちは、どここの貴族や王宮に送られても良いようにと、数ヶ国語の読み書きや、踊りに歌などの教養を身につける時間のほうを優先させられていた。肌荒れや日焼けを避けるために、日中に重い肥料や水樽を運ぶといった労働も免除されている。

だからビアンカはせめて日没後のわずかな時間だけでも仲間を手伝いたくて、夜になると熱心に働いた。

ところがその日は、宿舎から出ようとしたところを、老師の一人に呼ばれたのだ。

そして、今夜中に『庭園』を出て隣国フロッケンベルクへ行き、国王ヴェルナーの命を枯らせと命じられた。

そのほかの細かい道中の事は同行する使節団長に従え。老師が口にしたのはそれだけ。ビアンカは驚いたものの、すぐにかしこまりましたと答え、余計な質問はしなかった。余計な事を考えるのは罪だと教えられている。

たとえば、どうして隣国の王を毒殺しなければいけないのかという疑問も、老師が説

明しなかったのなら、ビアンカがそれについて深く考えたり質問したりするべきではないのだ。

どう生き、いつどうやって死ぬのか、全ては自分たちよりずっと優れた老師たちが、間違いないように定めてくれる。

理由など知らなくても、老師の命令は絶対だから、フロッケンベルク王ヴェルナーの命を毒で枯らさなければ。

役割を果たしたあとで、ビアンカは自害する。万が一失敗した時は、逆にヴェルナーに殺されるだろう。

どちらにしてもビアンカは、数日中に死ぬ。

死ぬのも痛いのも怖いけれど……老師の命令である。

余計な事は考えず、ただ老師様に従うべきなのだ。

そうして、ビアンカは旅立った。

案内された宿泊用の部屋は、いくつもの部屋が続き扉で繋がっている立派な客室だった。

使節団の男性たちは、数人ごとで一部屋を使い、ビアンカが一番狭い部屋を一人で使

用するように言われる。ビアンカの衣類が入った荷物もその部屋に置かれた。一番狭いと言っても、ビアンカが『庭園』にいた頃、複数で使っていた部屋よりずっと広い。

瀟洒なデザインのテーブルセットや立派な安楽椅子に、そのまま寝転べそうな大きい長椅子。柔らかな寝具の揃った寝台などが置かれた、とても豪華な部屋だ。

ビアンカが立ったまま綺麗な天井絵を眺めていると、不意に続き部屋の扉が開いた。苦々しい表情の使節団長が入ってくる。

「くそつ、予定は変更だ。今晚、国王がお前を呼んでも、具合が悪くなったふりをして時間を稼げ。お前が役目を果たすのは、俺たちが安全にすらかったあとだ」

先ほどまでとは大違いの乱暴な口調と態度で、使節団長はぎろりとビアンカを睨んだ。

「はい」

ビアンカは頷いたが、ふと心配になる。ヴェルナーは彼らの逗留期間をはっきりと言わなかった。自分が役目を果たすのは一体、何日後なのだろう？

「ただ……わたしはあれがなくては……」

「念のために数日分の予備を持ってきた。ほら、今日のだ」

団長が上着のポケットから小さな薬包を取り出し、テーブルの上に載せた。

テーブルには水差しとグラスが用意されている。ビアンカは手袋をした手でコップに水を少量だけ注いだ。薬包を開き、中に入っていた茶色い粉薬を口に含む。舌に広がる苦味を堪えつつ、グラスを顔より高く持ちあげ、グラスの縁に唇が触れないよう、口を大きく開けて、慎重に水を口内へ流し込んだ。

行儀も見えた目も悪いやり方だが、庭園の外ではこうしろと教え込まれていた。

食器類に口をつけられ、唾液が付着する。何かの拍子にほかの人間がそれに触ったりすれば、猛毒に苦しめられるだろう。それが騒ぎとなると、目的を果たす前に正体がバレかねない。

慣れない飲み方に苦戦しながら、苦い粉末をようやく喉に流し込むビアンカを、団長が薄気味悪そうに眺めていた。

この粉末は、アコニトという草を乾燥させたもので、本来ならば致死の毒薬だ。しかし、赤子の頃から時間をかけてこの毒を全身に宿したビアンカは、今では毎日これを吞まなければ生きていけない。

団長が、持参した革袋を広げた。ビアンカは空っぽの薬包をその中へ入れる。彼女は長袖のドレスを着て、手袋もしているし、自分の毒が辺りに付着しないように気をつけていた。それでも団長は布越しにもビアンカに触れないよう、慎重に避けている。

その時、廊下から複数の足音が近づいてきて、外と繋がっている扉がノックされた。「ビアンカ。ヴェルナーだが、君と少し話がしたい。入っても良いだろうか？」

(え!?)

紛れもない国王自身の声に、ビアンカは驚いて使節団長の顔を仰ぎ見た。

団長にも予想外だったらしく、青ざめて扉を睨んでいる。

「寝込んだふりをしろ。疲れが出たらしいと俺が言い訳をする」

革袋を上着の中に突っ込んで隠しつつ、団長が小声で囁いた。

寝台を顎で示され、ビアンカは急いでドレスの隠しを探り、極薄の防水布を取り出す。それを枕の上に広げ、髪が触れないようににした。それから、靴を脱ぎ、掛け布へ潜り込む。目を閉じると同時に、扉を開ける音がした。

「お待たせいたしました、陛下。誠に申し訳ございませんが、ビアンカは急に旅の疲れが出てしまったようです……」

「寝込んでしまったのか？」

「ええ。着いて早々にこの有様で、大変申し訳ないのですが……」

「氣にする事はない。それよりもすぐに医者を寄越そう」

「あ、いいえっ！ そのようなお手間をかけるには及びません！」

「遠慮は無用だ。すでに彼女は私が引き取ったのだから、私が氣遣うのは当然だろう」

「し、しかし……国から持参した滋養剤を吞ませましたので！ しばらく安静にしていれば、すぐに良くなるかと思えます」

ヴェルナーの落ち着いた声と、団長の焦りきった声が交互に聞こえる。時々、金属の擦れるような音が複数するのは、国王が護衛の兵を連れてきているからだだろうか。

謁見時の様子から考えれば、団長がいくら言い訳をしても、医者と呼ばれるかもしれない。そうしたら、すぐに毒姫とばれてしまう。

ビアンカの心臓が不安でドクドクと鳴る。

つい、そっと薄く目を開けると、団長の肩越しにヴェルナーと目が合った。

ギクリと身体が強ばる。

急いで目を瞑ろうとしたが、ヴェルナーからとても優しそうな声をかけられた。

「やあ、起こしてしまったかな」

王に、にこやかに微笑まれ、逆に目を見開いて、彼を凝視してしまった。

「騒がしくしてすまなかったね。食事は部屋に運ばせるから、何も心配せず、ゆっくりと休むが良い」

青ざめて硬直している団長の肩の向こうで、若い国王はヒラヒラと手を振る。

そして、医者と呼ぶと言った先ほどの言葉をあつさりと言つ込め、去っていった。
「……畜生^{ちくしょう}つ、なんだありや」

扉に耳をつけて足音をうかがっていた団長は、大きなため息とともに悪態^{あくたい}をついた。
「こうなりやすぐにでも逃げ出したほうが良いな。お前はまだしばらく、そのまま寝こんだふりをしていろ」

舌打ちをし、自身にあてがわれた続き部屋に戻っていく。

扉が完全に閉まり、ようやくビアンカも緊張が解けた。ホッと息をつく。

窓から見える初夏の空は、まだまだ明るい。けれど、柔らかな寝具が心地良く、自然と瞼^{まぶた}が下りてきた。

ここ数日の旅路と目的に対する緊張で、疲れが溜^たまっていたようだ。

閉じた瞼の裏に、なぜか先ほど見たヴェルナーの姿が浮かびあがる。

ビアンカが自国ロクサリスの王に会うなど出来るはずもなかったから、国王という人に会うのは彼が初めてだ。

国の支配者は、『庭園』の管理者である老師たちみたいに、周囲を平伏^{へいふく}させる恐ろしい人だと思っていた。

けれど、実際に謁見^{えうけん}したヴェルナーは、常に柔和な表情で決して声を荒らげない。使

節団長を言いくるめた時さえも、老師たちが肉植物を従わせる態度とは随分違った。

手を振って笑いかけてきたヴェルナーの姿をビアンカはさらによく思い出し、瞼の裏に焼きつけようとする。

世話をしていた『庭園』の植物が、とても綺麗に花を咲かせた時みたいに。

肉植物が草花を育てるのは、自分たちが観賞して楽しむためではない。老師たちが薬に使うからだ。それゆえに、見事に育ったもののほど、すぐに摘^つみとられてしまう。

仕方がない事だけれど、せめてその綺麗な花の記憶を、少しでも長く自分の中に留^{とど}めておきたかった。

ビアンカは、素敵だと思っていたヴェルナーの姿を、思い浮かべつつける。

(だってあの人は、もうすぐ……)

彼の命を枯らすのは、ビアンカだ。

「っ！」

ビアンカの心の中にこやかな笑みを浮かべていたヴェルナーの顔が、たちまち、血を吐き苦しんでいるものに変わった。

ゾワゾワと恐ろしさが込みあげ、止めようもなく身体が震えてくる。

急いでヴェルナーの姿を消そうとするけれど、どうしてだか、ちっとも消えてくれない。

命の期限を決めるのは、老師たち。

もちろん毒姫の命もそうだ。

ビアンカは、幼い毒姫候補たちを何十人も世話し、老師に与えられる毒草に耐えきれず、血を吐いて死んでいく姿を見てきた。

彼女たちの死を悲しむと、老師たちからいつも、運命を受け入れると一喝^{いっかく}される。

だから、ヴェルナーの命がビアンカの毒で枯れるのも、決められた宿運^{いっかく}なのだと受け入れるしかない……

ビアンカはいっそう強く目を瞑^{つむ}った。

——あれほど震えつづけていたのに、いつの間にか眠ってしまったらしい。

廊下と繋^{つな}がっている扉がノックされる音にビアンカが目覚ますと、部屋の中はもう真っ暗だった。

「失礼します。夕食をお持ちしました」

女性^{おんな}の声に、ビアンカは寝起きの掠^{かす}れた声で返事をする。

すぐに扉が開き、盆を持った侍女が姿を見せた。

彼女が盆を手にしたまま壁際^{かき}のスイッチを押すと、天井のシャンデリアが輝き、室内

が一気に明るくなる。ガラスの球の中で光を放っているのは、ランプのような炎ではなく、魔法の光。

『庭園』では、火事を防ぐためにランプの使用はごく一部に限られ、殆ど^{ほとん}の灯りは魔法灯火^{ともしび}だ。だから、魔力を持たないビアンカたちが自由に灯りをつける事はできなかった。

しかし、このシャンデリアは魔力を持たないものでも使えるらしい。

ここフロッケンベルクは、このような『魔道具』を造る技術——鍊金術^{錬金術}の国だという。魔道具も鍊金術も、『庭園』では聞いた事がなかったから、来る途中の宿で初めてこういう品を見て、ビアンカはたいそう驚いたものだ。

魔力を持たない者でも使用出来る魔法の道具に改めて感心しつつ、ビアンカは慌^{あわ}てて寝台の上に身を起こした。

室内が明るくなると、侍女の容姿がよくわかる。

手早くテーブルに皿やカトラリーを並べ、茶を注^ついでいる彼女は、二十代の半ばといったところだろうか。リコリスの花のように真っ赤な髪を編^{まと}んで纏^{まと}め、日焼けした頬^ほには、うっすらとソバカスが残っている。

彼女は素早く食事の支度を終わると、こげ茶色の鋭い瞳でビアンカを一瞬見つめたあと、一礼をしてすぐに出ていった。

去り際の視線が少し気になったもの、彼女が持ってきてくれた食事を眺め、ビアンカは嬉しくなる。

食事は薄切りのパンに肉や野菜を挟んだものがメインだった。

美味しそうなシチューやゼリーは残念ながら諦めなければいけないが、フォークやスプーンに口をつけなくて良いパンなら食べられる。それは、おそらく偶然なのだろうが、ビアンカは幸運に感謝しながら、ハムと新鮮な野菜を挟んだパンを手にとった。

食べ終えて少しすると、先ほどの侍女が皿を下げに来る。

シチューやゼリーを食べられなかった理由は言えなかったが、せっかく用意してもらったものを残してしまった事をビアンカは詫わびた。

赤毛の侍女は、特に不審がりもせずに皿を片づけ、浄化魔法を籠こめたという丸薬入りの小瓶を差し出す。

「こちらは陛下よりお預かりしたものです。お加減が悪いのでしたら、湯浴ゆあみは避けたほうがよろしいだろうとお気遣いでした」

この薬は、錬金術師ギルドが作ったもので、一粒を噛かみ砕いて吞むだけで、浄化魔法をかけられたのと同じ効果がある、と彼女は説明してくれた。

つまり、身体と着ている衣服の汚れが瞬時に清められるようだ。

『庭園』で、老師たちが浄化魔法を使っているのをたまに見た事がある。

老師たちが言う事によると、魔法は選ばれし者だけに与えられる特別な才能^だだ。

だから、『庭園』の維持のために必要な魔法灯火^{ともひ}や結界は別として、肉植物^{にくしょくぶつ}ごとに大切な魔法がかけられる事はない。

そんな魔法の薬を、自分のようなものが貰って良いのかとしばし迷ったが、結局ビアンカは小声で礼を言つて、薬を受け取った。

毒姫の汗には強い毒素が含まれているので、『庭園』ではビアンカたちの使った湯や衣服を洗った水は、専用の水路へ流している。けれど、『庭園』を出てからは、汚水を流す専用の水路がないので湯浴みも洗濯も出来なかった。さすがに謁見^{えつけん}に汗臭いまま臨^{のぞ}む訳にはいかなかったのだ。昨日は王宮近くの宿に泊まり、布で身体を拭^ふいたのだ。その布や汚れた衣服は使節団長が全て燃やしてくれた。

今日は緊張しすぎたせいか、汗でドレスがかなり湿っている。寝間着^{ねまき}も含めて、替えの衣類は何枚か持ってきてきているが、このまま着替えても気持ち悪いだけだろうし、服の始末に困る。

ビアンカは小瓶の蓋^{ふた}を開けて、小指の爪ほどの丸薬を一粒口に入れた。苦味を覚悟しながら軽く噛むと、意外にも、苺^{いちじ}に似た甘酸っぱい味が口に広がる。

ところが美味しい欠片^{かけら}を呑み下した瞬間、オレンジ色の炎が全身を包んだ。
「きやあっ!?」

ビアンカは驚愕^{きょうがく}に悲鳴をあげた。

思いつくと、老師たちが浄化魔法を使う時も、一瞬こんな色の炎に身体を包まれていた。見るのと自分で体験するのでは、全然違う。

驚いた拍子に、手から小瓶を放り投げてしまい、飛んでいったそれが侍女の額^{ひたい}にまともにもぶつかった。ガツツと固い音が鳴る。

「ごめんなさい！ 痛かったでしょう!」

慌てて駆け寄ったが、侍女は表情を変えなかった。何事もなかったように、柔らかな絨毯^{じゅうたん}に落ちた瓶を拾いあげる。

「大丈夫です。軽く当たっただけですのぞ」

平然と答えた侍女は、姿勢を正して、ビアンカへ深々と頭を下げる。

「こちらこそ、説明不足で申し訳ございません。ロクサリスからいらっしやった方なので、浄化魔法には慣れていると思ひ込んでおりました」

「浄化魔法を見た事はあつたけれど、わたしは魔法を使えないから、驚いてしまつて……」

「そうでしたか」

侍女は頷^{うなず}き、瓶をテーブルの上に置いた。それからチラリとビアンカへ視線を戻し、引き結んでいた唇を解く。

「この薬も浄化魔法と同じように、汚れが落ちた実感はあまりありませんが、埃^{ほこり}や汗などは全て落ちています。一日に一錠で十分ですから、それ以上はお呑みになりませんように」

落ち着いた声で説明され、ビアンカは改めて自分の身体を見下ろす。

侍女に小瓶をぶつけてしまった事ばかりに気を取られていたが、たしかに濡れた布で肌を拭^ふいた時のようなさっぱりとした感じはしない。

それなのに、肌に触れるドレスの布は、もう汗ではりついていなかった。

「はい！ ありがとうございます」

意外に親切な侍女に、ビアンカは笑顔で頷^{うなず}く。

「それでは失礼いたします」

侍女は淡々と言うと、そのままさっさと退室していった。

* * *

「――以上の事から、彼女は間違いなく毒姫と思われまふ」

執務室で、赤毛の侍女アイリーンからの報告を聞き、ヴェルナーは片手で額を押さえた。山一つを国境として隣接しているロクサリス国とフロッケンベルク国は、祖先は同じと言われ、言語も同じで文化も似ているが、昔から非常に陰悪な間柄だ。

その最たる原因は、魔術師ギルドと錬金術師ギルドにあるのだろう。

ロクサリスの歴史書には、『魔法使いの矜持きやうじを軽んじ、魔術師ギルドを追い出された者たちが、山の北側に集落を作った。それが錬金術師ギルドであり、フロッケンベルク王国の始まりである』と書かれている。

一方、フロッケンベルクの歴史書には、『柔軟な発想を必要とする魔道具造りについていけなかった魔法使いが、錬金術師ギルドから役立たずと解雇され、山の南側で魔法だけを重視するようになった。それが魔術師ギルドであり、ロクサリス王国の始まりである』と正反対の事が書かれている。

どちらが正しいかは謎だ。

ただ一つ確かなのは、魔法を使うのに必須となる魔力は生まれつきの才能である事。

魔力のある者が、努力でより高度な魔法を使いこなせるようになる事はあっても、魔力がない者が魔法を使えるようになる事はない。

世界中を眺めれば、魔力を持たない人間のほうが遥はるかに多い。

大陸の主な諸国と比べ魔力持ちが生まれやすく、高い魔力を持つ者が支配者層を占めているロクサリス国において、魔力を持つ人間は持たない者より優れていると考えられている。

一方、二番目に魔力持ちが多いフロッケンベルクでは、やや事情が異なった。フロッケンベルクは、作物もろくに育たないほど極寒の地。そのうえ、凶暴な人狼族じんろうぞくのなわばりに近く、彼らの略奪にも苦しめられていた。

そうした中で、魔法はたしかに重宝されたが、数少ない魔法使いに頼ってばかりでは生き残れない。

魔力を持たない人たちは、魔法を学ぶ代わりに身体を鍛えて、強靱な肉体と武力を手に入れた。そうした戦士が魔道具で武装をすれば、危険な雪山でも獲物を狩れたし、ほかにも魔道具を活用する事で、なんとか衣食住の確保を出来たのだ。

錬金術師ギルドの魔道具は、魔法使いの少ないほかの国々でも、便利な品と重宝されるようになってきている。

現在、フロッケンベルクは錬金術師ギルドの輸出品と傭兵ようへいの派遣による外貨で、成り立っていた。

それがロクサリスの魔術師ギルドとしては、非常に面白くない。

選民意識の高い彼らからすれば、誰でも魔法を使えるようにする魔道具は、自分たちの存在を軽くする悪魔の道具だ。

魔法使いの矜持を安売りする恥知らずがと、錬金術師ギルドを罵る。対抗して、錬金術師ギルドも頭の固い高慢ちきめと言いつ返し、見るに耐えない泥仕合を続けている。

歴史を遡れば、これが原因で大小百を超す戦が起っているのだから笑えない話だ。ここ数十年は戦が起っていないが、それはロクサリスがかけてくるちよつかいを、フロッケンベルク王家が受け流しているからにすぎない。

ヴェルナーも先代の王である父も、その前王の祖父も、挑発に乗って不要な争いをするべきではないという考えだった。

錬金術師ギルドとしては面白くないだろうが、この国では王の発言力が強い。それに加え、不要な戦が彼ら自身にも不利益を与えるのは明らかなので、怒りを収めてくれている。

それがロクサリスから突然、長年の亀裂を埋めて友好を深めるため、使節団を寄越したいと連絡が来たのだ。

非常に怪しいと思うのが普通だろう。

とりあえず角が立たないように迎え入れ、油断して尻尾を出したら即座に捕まえよう

と、入念に準備をしておいた。

城へ来た使節団の中に、どうやら献上される女性がいるらしいと聞き、毒姫ではないかと、謁見前から用心していたのだ。

(どうして、彼女なんだ……)

ヴェルナーは俯いてアイリーンから表情を隠しつつ、心の中で呻く。

謁見の間で、ヴェールを脱いだ彼女を見た時に、あやうく驚きの声をあげそうになった。ビアンカは知らないだろうが、ヴェルナーは彼女と会った事がある。

互いに名前も告げないままだった彼女を探し出してもう一度会いたいと思うほど惹かれた。一方で、自分の立場を考えれば、もう二度と会わないほうが良いのかもしれないと、ずっと悶々とした気持ちを抱えていたのだ。

思ってもみない形で、彼女との再会が果たされた。

毒姫は、この国の錬金術師ギルドでもよく知られている。

やけに瞳孔が開いて黒目がちに見える瞳、暖かな季節にもかかわらず長袖で襟元の詰まった服、防水加工された薄手袋など、ビアンカからは毒姫の特徴が端々に見えた。おまけに使節団の面々は彼女に決して近づこうとしない。

そこでアイリーンを、ビアンカの部屋の天井裏に忍び込ませたのだ。彼女は、ビアン

カと団長とのやりとりや、ビアンカが粉薬を呑む妙な方法など、全て見ていた。さらに、夕食のメニューでもビアンカを試した。

もしも彼女が毒姫の正体を上手く隠したいのなら、カトラリーを使うものには一切手をつけないはずだと。……そのとおりの結果が、アイリーンの持ち帰った盆に載っている。

このような作業をあつさりこなすアイリーン・バーグレイは、本来、侍女ではない。

彼女はバーグレイ商会という隊商の首領の一人娘。そしてバーグレイ商会は、代々フロッケンベルク王家に仕える密偵機関である。

表向きは、ごく普通に大陸中を行商しているが、裏ではフロッケンベルク国のために各地で情報収集をし、時には極秘裏の王命をこなしてきた。

だから本日も、アイリーンは数人の仲間たちと、使節団を見張るために城内に張り込んでいたのだ。

そのアイリーンの、ビアンカが毒姫ではない証拠をどうにか見つけさせたくて、ヴェルナーは確認を命じた。

しかし、なかば覚悟していた結果に唇を噛む。

「彼女を助きたい。国王としてではなく、私の個人的な我が侭だ」

ヴェルナーは顔を上げ、ようやく決断を口にした。

念を入れてアイリーンを天井裏に潜ませたものの、彼とてビアンカと使節団が、黒だと思っただからこそ、兵を率いて彼女の部屋を訪ねたのだ。

仮病を使われるのも予想済みで、それを逆手にとって医者に見せ正体を明かそうとした。

……しかし、困りきった顔でこちらを見るビアンカと目が合った瞬間、心に定めたはずの覚悟が霧散した。

フロッケンベルク国王の立場からは、そうすべきだとわかっているけど、彼女を暗殺者の一員だと追いつめる事が出来なくなってしまったのだ。

だってビアンカはあの時、困っていた見ず知らずの自分を助けてくれたのだから。

ヴェルナーの正体を知らない彼女は、見返りを求めず、彼に手を貸し、名前も告げずにふわりと微笑んで去っていった。

ヴェルナーは苦渋の表情を浮かべる。そんな彼を眺め、アイリーンは頭につけた侍女用のレース飾りを剥ぎとると、困ったように眉をひそめた。

「助けたら……あなたを暗殺してきた子だよ？」

アイリーンはヴェルナーと年の近い幼馴染で、身分の差こそあれ親友でもある。

国王ではなく、あくまで個人としてヴェルナーが話しているのに気がついたのだろう、アイリーンは幼馴染と話す遠慮のない口調になった。

「わかってる。だが……彼女が自ら望んで暗殺をたくらむ訳がない」
 「そりゃそうさ。毒姫は、事情なんか何も知らされない。使い捨ての毒針なんだから」
 アイリーンは素っ気なく言ったものの、気まずそうに咳払いをした。

「まさかロクサリスじゃ、毒姫なんて、まだ造っていたとはね。あたしだって、そんな環境に育った彼女に同情はするし……うん、話した感じじゃたしかに、悪い子ではないとも思うよ」

ビアンカが浄化魔法に驚いて瓶を放り投げ、それがアイリーンにぶつかった時の事を、ヴェルナーに話す。

実は、瓶が倍の速さで飛んできてアイリーンなら掴み取れたのだが、普通の侍女を演じきるため、あえてそのまま動かなかったのだ。

「あたしが痛かっただろうって、えらく心配してくれちゃってさ。優しい子なんだろうね」
 「やはりそうだろうー」

意気込んで、ヴェルナーはつい机越しに身を乗り出す。アイリーンが胡散臭そうに半眼で彼を見た。

しかし彼女は首を横に振り、それ以上ヴェルナーを深く追及しない事にしてくれたらしい。賢い獵犬を思わせるような鋭い視線で、ヴェルナーをじっと見据える。

「それでもさ、あの子は毒姫だよ。しかももう、それなりの年齢に育っちゃってる」
 「ああ」

「あんたの言う『助ける』が、安楽死の薬を吞ませる事じゃなく、あたしの考えるのと同じ方法だとしたら、あの子にとってそれが救いだと言断するのは、ちと傲慢だと思うよ。余計、苦しませるだけに終わるかもしれない」

「君と同じ考えだと思うよ。これは私の我が侬だとわかっている。だから、彼女が私の手を取ってくれるよう、最大限の努力をするつもりだ」

ヴェルナーが答えると、アイリーンは軽く肩を竦めて「やつぱりね」と小さく呟いた。そして再び侍女の飾りを頭につけ、改まった口調に戻る。

「それでは、使節団の見張りに戻ります。彼らは城を抜け出す計画を立てておりましたので、明日の早朝にわざと逃がします。城外で捕獲するのが最適かと」

「ああ、頼む」

ヴェルナーは頷いた。

彼らをこのまま城内で捕獲し、ビアンカへ吞ませていた毒薬を証拠に暗殺者と認定するのは容易い。

当初はその予定だった。

だが、ビアンカが仲間だと糾弾きやうたんされないためには、視察団を密かに捕らえなくてはならない。

ヴェルナーは右手の指にはめた、青い石の指輪を弄いじった。指輪の石の部分は蓋ふたになっており、開くと中には銀色の粉薬が入っている。

水差しからコップに水を注ぎ、ヴェルナーはその薬を一息に呑み干した。

* * *

翌朝。

ビアンカはかなり早い時間に目を覚ました。

昨日は夕方から眠ってしまったせいかもしれない。

カーテンの隙間すきまから、少し青白い陽光が差し込んでいる。三階にあるこの部屋の厚いカーテンをそと開くと、朝もやが薄くかかる外の景色が見えた。

手入れされた庭を高い石塀が囲み、その向こうに王都の町並みが広がっている。

大きな両開きの窓ガラスは二重になっていたが、掛け金を外せば簡単に開いた。部屋は三階にあるとはいえ、下にちようど良さそうな植え込みがある。

ここから飛び降りても、怪我するだけで済むかもしれない。

ビアンカは窓を閉めた。

荷物を開けて着替え、いつも『庭園』でやっていたように髪を簡単に結び、髪飾りをつける。

隣の部屋はやけに静かだ。団長たちは昨夜遅くまで何か話していたようだったから、まだ眠っているのだろう。

ほどなく昨日とは別の侍女が朝食を運んできた。盆に載せられているのは一口大の小さなタルトにチーズ、大粒のブルーベリーなど、そのまま摘つまんで食べられるものばかりだ。朝食を終えてから、しばらく部屋で大人しくしていた。けれど、続き部屋のほうは相変わらず静かで、使節団長が指示をしに来ない。

『庭園』にいる時は、いつも何をすればいいのか老師から指示があった。この道中では、使節団長に従うよう命じられていたから、彼が来ないとどうしたら良いのかわからない。迷ったものの、思いついてビアンカは続き部屋の扉をノックした。

しかし、返事がない。

何度ノックしても同じで、しまいにそと扉を開けてみると……誰もいなかった。

(え……?)

寝台は寝乱れたままで、荷物は一つも残っていない。さらに向こうの部屋に繋がる扉も開けっ放しになっていて、無人の室内が見える。

すぐに逃げ出すつもりだと団長は言っていた。もうすでに旅立ったのだろうか？

廊下のほうの扉を恐る恐る開けた途端、物々しい槍の金属音とともにビアンカの前に大きな影が立ち塞がった。

扉の脇に立っていた大柄な兵士が、生真面目そうな顔でビアンカを見下ろす。

「視察団の方々は早朝に発たれました。後ほど陛下がお見えになりますので、申し訳ございませんが、外出は控えていただきたく存じます」

「はい……」

ビアンカは大柄な兵士の圧迫感に、小さく震えながら頷いた。いつからここに見張り立っていたのか、気がつかなかった。

「必要なものがあればご用意しますので、お申しつけください」

そう言って兵士は扉を閉めてしまった。ビアンカは朝日の差し込む部屋の中で立ち尽くす。

視察団が去ったなら、ビアンカはすぐに役目を果たさなければならない。すなわちヴェルナーの暗殺だ。

(あ……っ！)

不意に重大な事に気づき、ビアンカは続き部屋へ駆け込む。

棚や引き出しを探してみたが、あの薬は見つからない。やはり団長は残りの薬を持っただまま逃げてしまったようだ。

毒薬を吞まなければ、三日ともたずに毒姫は死んでしまう。

薬が切れて死ぬ時は、凄まじい苦痛が伴うと、老師から聞かされている。

敵を殺して、使命を果たし自らの手で死を迎えるのが、唯一、苦しまない方法だとも……

(薬は残っていない方がいいのよ。もし見つけられたら毒姫だとバレてしまうもの。ヴェルナー様とは、すぐにお会い出来るようだし、そうすれば……)

ドクドクと激しく暴れる心臓を押さえ、必死に自分へ言い聞かせる。

本来ならば昨夜には全て終わっていたはずなのに、予想外の出来事が続いたせいとか、不安でたまらない。

そのうち、侍女が掃除をしに来て、続き部屋から締め出されてしまい、ビアンカはひとすらすら落ち着かない気分のまま自室で過ごした。

部屋の安楽椅子は座り心地が良いし、退屈しないようにと、ヴェルナーが数冊の本ま

で届けてくれた。

どれも面白そうなタイトルで、綺麗な挿絵がついていたが、不安が大きすぎてまったく頭に入ってこない。

昼食は、カトラリーを使わずに済む魚と野菜を挟んだパンで、なんの心配もなく食べられるはずだったが、一切れを呑み込むのが精一杯だった。

椅子や寝台に、座ったり立ったりし、部屋をうろうろと歩き回る。

部屋の置時計が午後の三時をさす頃、不意に扉が叩かれた。

「陛下がお見えになりました」

扉の外から聞こえた兵士の声に、ビアンカは椅子から飛びあがり、直立不動になる。

「はい！」

上擦つた声^{うわす}をあげると同時に、扉が開きヴェルナーが姿を現した。彼の横には、扉を見張っていた兵士がいるものの、ほかに護衛などは連れていないようだ。

「なるべく早く来たかったんだが、こんな時間になってしまった」

ヴェルナーはそう言いながら部屋に入ると、正面に立ってニコリと微笑^{ほほえ}む。

「政務の休憩時間が取れたから、少し城内を散歩でもないか？」

意外な言葉に、ビアンカは思わず目を見開く。けれど、服従しか教えられてこなかっ

た口が、返答に詰まる事はなかった。

「はい」

すぐにそう答え、ヴェルナーのあとに続いて部屋を出る。

「夏は特に忙しくてね。聞いているかもしれないが、ここは雪が深いので、夏しか外との通行が出来ないのだよ」

ヴェルナーの後ろにつき従うべきかと思ひ、一歩下がろうとしたのだが、彼はビアンカと並んで歩きながら、きさくに話しかけてくる。

そんな国王に、どう対応していいものか戸惑^{とまど}うものの、次第に彼の話に引き込まれ、気がつけば楽しく聞き入っていた。

それに、ヴェルナーが案内してくれる城の内部は素晴らしい。

手入れされた温室に、途方もない量の本を納めた図書室、見事な天井画の描かれた廊下など。これでも城のほんの一角だというから、迷子になりそうな広さだ。

使節団の人たちは、ヴェルナーやフロッケンベルクの国情にも詳しいようだったが、ビアンカには殆^{ほとんど}ど何も知らされていない。

道中で聞きかじったのは、ヴェルナーが早くに両親を亡くし、十四歳という若さで即位した事と、国民からとても人気があるらしいという事くらいだ。

そのせいか、国内の景色を描いた絵画の並ぶ廊下を案内されながら、ヴェルナーから聞く話は何れも興味深いものばかりだった。

大陸の最北に位置するフロッケンベルクは、一年の内に七ヶ月間が冬という極寒の地で、記録では最長で九ヶ月間も雪が降り続いた事があるそうだ。

深い森林に囲まれた王都は、夏の一時期しか外界に開かれないという。

冬の森には、大人の背丈よりも高く雪が積もるし、突発的な吹雪が多いため道に迷いやすい。

さらに、飢えた狼がうろつくうえに、恐ろしく凶暴な人狼族が、獲物を求めて高山地帯からよく下りてくるそうだ。

雪解けの春も油断は出来ない。溶け始めた氷雪が雪崩を起こす危険性が高くなるからだ。

だから、長い雪による閉鎖期間を耐え抜いた民にとって、夏は待ち焦がれていた開放の季節。

安全になった森林の街道を通って、物資を大量に積んだ隊商が続々とやってくるし、傭兵や錬金術師として他国へ出稼ぎに出ていた者も帰ってくる……

ヴェルナーからそんな話を聞きながら、ビアンカは美しい絵画の数々を眺めていく。

おのおの
 各々の季節を描いた絵が、数枚ずつあった。

真冬の雪景色の中、満月に吼える狼たちの絵。短い秋に色づく木々と、獲物を狩る猟師の絵。残雪の合間から小さな緑の芽が息吹く春の絵。

そして、夏の王都を描いた絵には、ひしめく幌馬車の列や、出稼ぎから帰った人々と待っていた家族が喜び抱き合う姿が明るい色彩で描かれている。

ビアンカは特に、家族の絵が気に入った。

家族がどんなものか知らないけれど、描かれている人々はとても嬉しそうな顔をしていたから。

肉植物にだって親兄弟という存在はいるとは思うのだが、『庭園』ではどの肉植物も、まったくそういった関係になかった。

夜伽をするために育てられ、外へ送り出される肉植物もいるが、彼らは不要に子を孕まないよう身体を作り変えられている。それに、肉植物同士が親しくする事や、勝手な交配は固く禁じられていた。

そのような真似をすれば厳罰として、即座に『庭園』の最下層にある地獄へ落とされる。だから、誰もそんな関係を持つとしなかったし、新しい肉植物が生まれる瞬間を見た事はない。

きつと、老師たちに交配を許された者たちが、あの広い『庭園』のどこかで、新たな実を^{はぐく}育んでいたのだろう。新しい肉植物の赤子はいつも、老師たちがどこからか必要な数を連れてきた。

彼らがどこから来たのか尋ねたり、自分の家族について考えたりする事は、許されなかった。

肉植物は肉植物であり、家族という存在が必要ないと老師が判断したなら必要ないのだ。

そんな事を思い出しているうちに、風景画の列は終わった。

「——と、まあフロッケンベルク王都の一年はこのようなものだ。王都は長く雪に閉ざされるから、ここに住むと非常に大変で不便な生活を強^しいられると、他所^{よそ}の人間には思われがちだがね」

おどけるように軽く肩を^{すく}竦めたあと、ヴェルナーはすぐ快活に笑った。

「たしかに大変な部分も多いのだが、厚く氷が張るからこそ、夏も十分な氷が確保出来るし、この城は雪に囲まれた姿が一番美しいと私は思う。王都に住む者だけが見られる姿だ」

楽しそうに言う彼につられてビアンカも^{ほほえ}微笑んでしまった。

「そろそろ部屋に戻ろうか」

ヴェルナーが踵^{かかと}を返し、ビアンカもそれに従う。

部屋に戻ると、兵士が敬礼をして扉を開け、ヴェルナーは先立って部屋に入る。二人の背後で、扉が静かに閉められた。

ヴェルナーは立ったまま、しばらく窓の外の傾^{かたむ}きかけた夏の陽を眺めていたが、ゆっくりと振り向く。

「君が、冬の王都やこの城を気に入ってくれば嬉しい」

ひととき穏やかな声音とともに微笑まれ……その瞬間、冷水を浴びせかけられたように、ビアンカは我に返った。

クリーム色の壁と青銀の屋根をしたフロッケンベルクの王城を、ここに来る時にとっても綺麗だと思っていた。それが、冬にはもっと綺麗になるらしい。

ヴェルナーがあんまり楽しそうに話すから、ビアンカもつい聞き入り、その素敵な景色がいずれ、自分の前にも訪れるような気になっていた。

——どんなに素敵でも、それを見る事など出来る訳がない。だって、もうすぐに……
「……はい」

声は、消えそうなほど小さく震えてしまった。

部屋に二人でいる今が、絶好の機会だ。しかもヴェルナーは、ビアンカと身体が触れ合いそうなほど近くにいます。

教えられたように、このまま手を伸ばして首筋に抱きつき、死の口づけをすれば良い。やらなければと思うのに、足がどうしようもなく戦慄く。

昨日、^{まふた}瞼の裏に浮かんだヴェルナーの苦しむ顔が、チラチラと見えるような気さえしてきた。

必死で笑顔を保とうとするビアンカを、ヴェルナーはじつと眺めていたが、ふとその表情が真剣なものになる。

「君は、毒姫だな？」

「——っ!!」

ビアンカは総毛立ち、ハクハクと唇を震わせた。

（どうして!? なぜ見破られたの!?)

頭の中が恐怖でいっぱいになって息が出来ず、喉がヒツ、ヒツと変に鳴る。

（もうだめ！ 見破られたら、捕まって、死んだほうがましなほど、痛くて苦しい目にあわされる!!）

「ビアンカ、落ち着いてくれ。私は君を……」

ヴェルナーが何を言っているのかよく聞きとれない。

ただ、老師たちに繰り返し教えこまれた声が、頭に鳴り響いた。

『万が一暗殺に失敗しても、絶対に捕まるな。その前に死ね！ 自分で死ね！ 死ね!! 死ね!!!』

無意識に、ビアンカは自分の髪飾りを引き抜く。

その拍子に足がもつれて、^{ぶざま}無様に^{じゅうたん}絨毯へ^{しりもち}尻餅をついてしまったが、花を象った飾りを握り締めたまま離さずに済んだ。するどく尖らせた飾りの先端で自らの喉を突こうと振りあげる。

「待て——」

ヴェルナーが叫び、ビアンカに飛びかかった。髪飾りを握った手首を掴む。

振りほどこうとビアンカは暴れたが、もう片方の手首も押さえられた。

恐怖に声も出ないまま、もがきつづけたが、床へ仰向けに倒れた身体にのしかかられて、完全に動きを封じられてしまう。

「陛下！ いかがなさいましたか！」

激しい音が、外にまで聞こえたのだろうか。兵の焦り声とともに、扉が開く音がした。その瞬間。ヴェルナーはビアンカの両手首を片手で纏めあげると、もう片方の手で彼